

【異文化言語習得論】

白井恭弘 (2012). 『英語教師のための第二言語習得論入門』 大修館書店 (pp. 36-78)

2012/05/21

S.T.

[第1章 第二言語習得論のエッセンス 言語習得の本質とは何か & まとめ]

「インプット仮説 (input hypothesis)」と「自動化理論 (automatization theory)」の考え方がある

「インプット仮説」(pp. 36-44)

- 「言語習得はインプット (聞くこと、読むこと) によって起こるもの」という考え方
 - 「インプット」は、言語において次にどのような語が来るかを無意識的に予測する「予測文法 (expectancy input)」を学習者に身に付けさせるとされる
 - 予測文法の育成には言語の意味と形式をリアルタイムで理解・処理する過程が必要であるため、学習者に与えるべき「インプット」は「理解可能なインプット (comprehensible input) (*1)」であるべきだ
 - 言語習得にアウトプットは不要であり、明示的知識は発話の正しさをモニターにのみ寄与する
 - インプット仮説に基づいた教授法として「理解優先の教授法 (comprehension approach)」を提案
 - 「全身反応教授法 (Total Physical Response: TPR)」のように、production ではなく comprehension を中心に行う指導法を推奨 (「イマージョン教育 (immersion)」も comprehension approach に該当する)
 - クラシェンはナチュラルアプローチ (※2) を提案しているが、必ずしも効果 (Speech will emerge) が現れない事例も報告されている (e.g., 両親が聴覚障害者の子・受容バイリンガル)
 - 言語習得には「インプット」に加えて「アウトプットの必要性」が必要と考えられ、学習者は「アウトプットの必要性」によってリハーサル (*3) (意識的・無意識的なアウトプット) が要求される
- (*1) 現在の言語能力レベル (これを i とする) より少し上で、理解可能なインプット ($i+1$) が言語習得に必要であるとする。特に、学習者が意思疎通を図るために対話者同士の意思を理解し合おうとして、発話を修正したり言い換えたりする相互交流的修正が言語習得を促進すると考えられている
- (*2) 外国語教室において自然な言語習得を促進するために、(1) コミュニケーション能力を育てることを目的とし、(2) 理解可能なインプットにより学習者の LAD を働かせる (3) 言語習得が進むまでの沈黙期にはアウトプットを強要しない (4) 「話す・書く」の前に「聞く・読む」を十分にさせる (5) 情意フィルター (目標言語を受け入れようとする気持ち) を低くして学習者がインプットを取り入れるよう促す (6) 明示的知識はモニターの働きしかないことを認識する という教授法

「自動化理論」(pp. 44-46)

- 「明示的知識を身に付け、それを練習することによってそれらの知識を徐々に自動的に使えるようにする」という考え方 (e.g., ゴルフのスイングや車の運転)
- 「自動化理論」は明示的知識により、(a) 発話の正しさをモニター (b) 自動化により実際に使える能力に貢献 (c) インプットだけでは気づかないことの「気づき (noticing)」を促す点で効果がある
- その一方で、「複雑な言語ルールを全て明示的知識として習得することは不可能」、「仮に言語ルールを理解できたとしてもルールが使えるかどうかは別問題」という点で問題があると考えられる

まとめ

- 「インプット理論」と「自動化理論」の両方を最大限利用することが肝要である
- 日本の英語教育においては「インプット理論」に基づいた教育が不足している傾向にある
- 「インプット」により明示的・暗示的知識を身に付けさせ、その後「明示的知識」を用いてそれらの知識の確認、知識の自動化、そしてインプットだけでできなかった気づきを促すことが大切である

[第2章 SLA からみた日本の英語教育～現状とこれから～]

SLA の視点から効果的な英語教育の原則を検討し、その上で日本の英語教育の問題点・解決案を論じる

「オーディオリンガル教授法 (オーラル・アプローチ) 」 (pp. 52-54)

- 「パンプラクティス、例文暗記などを通じて様々な言語構造を口頭でドリルさせる」指導法で、心理学を理論的基盤にしたトップダウンの手法である
- 「意味」を考えなくても可能な活動が多かったことに大きな問題がある

SLA 研究の誕生 (pp. 54-56)

- Pit Corder が「誤用分析 (error analysis)」及び「中間言語分析 (interlanguage analysis)」の重要性を指摘し、第二言語学習者のデータに焦点が当てられるようになった
- SLA 研究により (a) 教えられたものがすぐに習得されるとは限らない (b) 明示的知識と実際に使用できる知識 (暗示的知識) は異なることが明らかにされた
- 「実際に使用できる知識」を増やすには、言語を「コミュニケーションの手段」として使用する必要がある (コミュニカティブ・アプローチ (communicative approach))

インプット vs アウトプット (pp.56-64)

- インプットだけで言語習得が可能であるとする「インプットモデル」(クラシェン、バンパタン) と、言語習得にはインプットに加えてアウトプットが必要とする「インプット=インターアクションモデル」(スウェイン) という異なる立場がある
- 学習者に与えるインプットに関しては「背景知識により理解可能なインプット (クラシェン)」と「文法処理が必要なインプット (バンパタン)」のように見解が分かれているが、前者は「意味的な処理 (semantic processing)」のみで「統語的な処理 (syntactic processing)」まで考慮していない可能性がある
- それに対して、「インプット=インターアクションモデル」では、「意味的な処理」から「統語的な処理」にもっていくための手段としてアウトプットが必要であるとしている
- アウトプットの効果としては、(a) 自分の英語のギャップに気づく (b) 自分の英語の正しさを仮説検証する (c) 言語に関する意識 (メタ認知) が高まる (d) 自動化につながる が挙げられる
- しかし、アウトプットは既にある知識を使うことしかできないため、新しい知識の獲得はインプットによってのみ可能となる
- インプットした情報を効率よく習得できるようにアウトプットを行うことが適切な指導法と言える
- インプットとアウトプットの組み合わせとしては、「大量のインプットと少量のアウトプット」が望ましいと考えられ、「インプット (新しい知識; 統語的処理を必要とする)」→「アウトプット (ギャップ

の気づき) → 「インプット (インプット強化)」の形が効果的であろうと考えられる

日本の英語教育の現状 (pp.64-70)

- 日本の英語教育の問題点として以下の3点がある：(a) 理論が自動化モデルに偏り、かつ自動化の訓練も不足 (b) インプットの質・量ともに不十分 (c) 意思伝達よりも正確さの重視
- これらの問題点の原因としては以下の3点が考えられる：(1) 誤った英語学習理論 (2) 不十分な英語教員養成システム (3) 正確さを過大に重視した入学試験
- (a) 自動化モデルに偏った英語教育を行っているために言語のインプットが圧倒的に不足している、さらに明示的知識の教授に留まり自動化のプロセスまで行われていないことも多い
- 自動化モデルの偏重は (c) 意思伝達よりも正確さの重視 の問題とも関連している。最初に正しい明示的知識を与え、それを練習するスタイルであるため、正確さ (accuracy) を重視することにつながる
- 自動化モデルの偏重は、(1) 自動化モデルでなくてはならないという教師の思い込みに起因する
- これらの教師の思い込みを生む背景として、(2) 不十分な英語教員養成システム と (3) 正確さを重視した入学試験がある
- (2) について、現在の日本の英語教員養成システムでは英語の教え方のテクニックについて十分に指導されず、教師にとって教えやすい自動化モデルの典型的な指導法である「文法訳読式」が伝統的に維持されてしまっている
- (3) について、入試では「書きことば」が中心であり「流暢さ (fluency)」がほとんど要求されない

日本の英語教育の問題点を解決するには (pp.70-78)

- 外国語学習の目的（「使える英語」を身に付けさせる）を念頭においた授業の展開が必要
- 「使える英語」を身に付けるには、実際の英語を使った活動（聞く・読む・各・話す）を重視するコミュニケーション・アプローチを重視することである
- インプットモデル・インプット＝インターアクションモデルで身に付くことは多く、反対に明示的指導法で教授したことが必ずしも身に付くとは限らない
- comprehensible input を確保したうえで、少量のアウトプットを保証することが言語習得の鍵である
- インプットについては「多聴多読」により十分なインプット理解のチャンスを与えることが必要
- アウトプットについては、ある程度流暢にインプットが処理できるようになった段階で実際のコミュニケーション活動を通して知識を使えるものにしていく（自動化を促す）必要がある
- 教員養成システムを改善するには、英語教員資格を取得するための課程を変更することが必要であり、英語学や英文学を中心とした課程から英語教授法関係の授業に変えることが求められる
- 正確さを過大に重視した入学試験を改善するには、伝統的な和訳や文法問題を減らしてリスニングの比重を高めることが必要である
- また、4技能をバランスよく測定するべく、スピーキング能力を測定するための工夫が必要である

ディスカッションポイント

リハーサルと実際のアウトプットの違いは？実際のアウトプットまで必要なのはどのような状況か？